

北海道

国際理解教育
研究協議会

会報

第27号

会長 大泉 弘
事務局長 石田省子
発行1993年10月20日

全国大会(東京)に参加して

北海道国際理解教育研究協議会
会長 大泉 弘
(室蘭市立本室蘭中学校長)

去る8月4日～6日迄の3日間、東京都の国立教育会館及び目白学園を会場に、第20回全国国際理解教育研究大会記念大会が開催された。

①研究大会日程は、次の通りである。

8月4日(第1日目)会場(国立教育会館)

午前 ・開会式

・記念式典

午後 ・講演「教育の国際化を考える」

講師 川村 恒明氏(国立科学博物館館長)

川村氏の講演では、我が国の国際化の現状を具体的な数値をあげて説明し、その後臨教審の国際化の進展を3つのステージに分析し、説明してくれた。

最後に、これからの国際理解にかかわる教育課程を教育基本法までふれた川村氏の持論を展開し、日本特殊社会論からの脱皮を強く訴えた。

多くの示唆と感銘を受けた名講演であった。

・パネルディスカッション

「学校現場における国際理解教育を提言する。」

「国際理解教育の推進は、教師の意識改革に負うところが大きい。」「外の人々との付き合いに教師が勇気を持ち目を開き取り組むことに喜びを持つことが必要である。」「人間としての喜び生きがいにボランティア活動やNGOの活動に関心をもつことも大切である。」「教室の中での良好な人間関係を育てることが重要である。」等

改めて教師の意識改革やボランティア活動、道徳教育の重要性を認識させられた。

8月5日(第2日目)会場(目白学園)

午前 ・分科会

今年度は、全国各都道府県からの発表が多く優れた実践発表がそろっていた。北海道からは、第1分科では、「サンホセ日本人学校における現地理解教育の実践」を持参して佐藤努先生(旭川・近文小)と第4分科会には戸松栄先生(釧路・寿小)が「地域に根ざした国際理解教育」のテーマでラムサール条約と釧路市の発表を行った。両先生とも参加者及び助言者より高い評価をうけたことをお知らせしたい。

午後 ・記念講演「21世紀の国際理解教育への提言」

講師 筑紫 哲也氏(TBSニュースキャスター)

筑紫氏の記念講演は、彼の豊富な国際体験と持論を交えての時間をオーバーする熱弁をふるった講演であった。

日本人の国際化への障害を事例に挙げながら日本人の自国文化への無知や教育課題、特に英語教育への厳しい批判と言語表現能力の重要性を力説していた。

8月6日(第3日目)会場(目白学園)

午前 ・分科会

午後 ・シンポジウム「世界に目を開き心を開く子供の育成をめざして」

全海研理事会報告

研究大会に先立って、理事会が港区赤坂小学校で開催された。各都道府県の理事が参加しての会議は年1回であり、どの議題の討議も貴重なものであった。

- 1、本部の事業及び活動内容は、昨年と変わらないが、研究紀要の編集発行については、より内容を充実させて行きたい。
- 2、全海研への組織加入についてであるが、各都道府県支部と全海研への同時加入は各県の組織上の実態も異なっており、今後も継続して実現をめざして取り組んでいくこととした。(北海道の場合、もう少し時間をかけて検討を要すると思われる。)
- 3、本部会費の値上げが承認された。研究紀要、印刷費、郵便などの費用の高騰から平成5年度の会費から、年額4000円となった。
- 4、全国国際理解教育研究大会の開催地であるが、平成8年度まで次のように決定した。平成6年度→新潟県 平成7年度→広島県 平成8年度→佐賀県
なお、平成9年度開催地を本部では、北海道開催を強く期待している。此の件については、前向きに検討していきたいと考えている。

研修部長 高 橋 宏
(札幌市立稲陵中学校)

豊かでたくましい心もち
世界にはばたく児童、生徒の育成
—— 国際性と共生の意識を培う国際教育の展開 ——

21世紀を間近にひかえた今日、世界の主なところへ24時間以内に行けるという交通の発達、通信の即時化、経済・学術・文化交流の活発化、ハイテクノロジーの進歩と相まって、地球はより狭く、小さくなり、ボーダレス化が始まり、人・物・金・技術・情報等が国境を越えて自由に行き来している状況であります。私達の身の回りにも外国人が多く見られるようになり、それに伴って、生活習慣の違いや価値感の衝突・摩擦などが生じてきています。

すなわち、政治・経済・文化・スポーツ等の交流に伴い、海外勤務者・海外旅行者が急増していますが、その交流の中で日本人の持っている特異性が指摘され、諸外国のさまざまな批判的となっている現象を見逃すことはできません。異なる宗教・文化を持った人間同士がお互いに理解し合い、歩み寄って、新しい文化の創造、多文化共生の社会を作り上げていかなければならない時代が到来しているのを感じます。

森林伐採による環境破壊と生態系に及ぼす影響、酸性雨が森林に及ぼす影響、フロンガスによるオゾン層の破壊、海洋の汚染等、地球破壊が私達の予想をはるかにこえて加速されている現実にも目を向けなければなりません。各国ともそれぞれの国際的責任を分担することが求められている地球社会時代であり、国際協力が必要な時代となっています。

現代は、世界の人々が文化や宗教の違いを越えて共に生き、そして、かけがえのない地球を守り抜く「宇宙船地球号、その乗組員」という意識をもたざるおえない時代であります。

つまり、グローバルに考え、グローバルに行動できる人材の育成がますます必要とされてきているわけです。グローバル化とは、相互依存関係が地球規模にまでひろがっている状態です。政治や経済をはじめ、どの人間生活の領域もグローバル化が進んでいます。世界の動きは、対立から協調へ、民族の独自性・主体性を確立しつつ、互いに共存を図り、地球的な視点にたって平和と繁栄を求めた新しい秩序の確立へと動いております。

このような国際社会の動きと変化をとらえた時、学校教育はどんな時代の変化にも対応でき、生涯にわたって豊かにかつ遅く生きる児童生徒の育成をめざすことは、私達の重要課題でもあります。新学習指導要領は、学ぶ立場に立ち、生涯学習社会への移行を図るため「変化への対応と国際化」をめざしたものだのとらえることができます。

国際化への対応として、新教育課程は、「国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する

態度の育成を重視する。」を掲げ各教科の改善を図っています。21世紀の未来に生きて行く子ども達の教育に携わる私達の責務は、特に大きいと思います。国際理解教育を推進する私達には、長期的展望にたつて持続的にたゆみなく課題へと取り組む姿勢が求められているのです。尊敬される日本人として個性豊かな独自性と主体性をもち、「国際社会に貢献できる主体性ある日本人の育成」を主眼に日々の創造的な教育活動にあたらねばならないと考えます。小・中・高の連携のもと、自国の文化を知り誇りをもち、他国の文化を理解し、お互いに尊重し合う中から、個々の世界観を作り上げることができる「豊かな国際感覚の育成」を意識した教育を求めていきたいと考えます。

そのため、研修部では、新学習指導要領のねらいを受け、学校における国際理解教育の充実・発展、さらに、学・社連携による地域に根ざした国際理解教育の推進、そして、帰国教育実践報告集の活用を最重点にあげ、次のような観点で研究を推進することを提言致します。

1、学校教育における国際理解教育の充実

身近な生活の中から素材を引き出し、「いつでも」「どこでも」、そして「だれでも」取り組める国際理解教育を日常実践を通して求めていきます。

2、地域に根差した国際理解教育の推進

社会教育や、地域の活動など地道な努力を重ねている多くの人々と手を結び学・社連携による国際理解教育の推進でより一層の効果を上げることをねらっています。そのためには、地域社会に根ざした国際理解教育の在り方を理解し、「開かれた学校」として、教育諸活動を見直す必要があると考えます。そして、生涯教育の中で目標はさらに深められていくのです。

3、実践報告集の活用

在外教育施設で多くの困難を克服しながら、海外子女教育に携わってきた帰国教師の貴重な体験を報告集「在外教育施設での教育の現状と展望」として、事務局でまとめています。この報告集は、各学校で国際理解教育を進める上での手引き書として今後の教育活動に大きな手掛かりになると考えます。

今回の釧路大会では、幼稚園をはじめ小・中・高の連携を生かした6クラスの公開授業を通して「豊かでたくましい心をもち世界にはばたく児童、生徒の育成」の主題に迫ります。ラムサール条約締結国際会議が開催された釧路市で、環境教育・共生の教育として国際理解教育の実践発表大会が行われることは、大変意義深く大きな期待が寄せられております。

この実践を交流し合う中で、さらに全道の関係者と知恵と力をだしあって、北海道における国際理解教育の充実・発展を目指して行きたいと考えております。

研究会案内 第8回 上川・旭川国際理解教育研究大会
期日 平成5年10月29日(金) 会場 旭川市立近文小学校 TEL0166-51-1496
研究主題 「たくましく世界に生きる子どもの育成をめざして」 ～身近な国際理解教育の実践～
授業 5年「工業をささえる人々」 授業者 佐藤努教諭 受付 9:00～

○授業の様子

「ロンドンばし」の曲やイギリスの写真の説明から、自分たちでは当たり前のことがイギリスでは、ちがうことや、イギリスのものだと知らないいろいろな情報を知っていたことに驚いたり、興味を示していた。そしてその興味を引くイギリスの「ロンドンばし」の歌やイギリスの子どもの遊びを感性を通して身近なものとして楽しんだ授業であった。

授業者の増田先生は「国際理解の授業だと特に子どもたちに構えさせないよう、この授業についての指導や連絡はしなかった」と話されていたが、自然な授業の中で、世界のつながりや文化にふれさせていた。

又、研究提言では、朝鮮初中高級学校の金教務主任から、朝鮮初中高級学校の歴史や教育・生活の様子と変化について発表があった。

この中で、特に教育理念は「知・徳・体」であること。過去の歴史はしっかり教え、そこから何が間違っていたかを見極める力を育てようとしていること。生活基盤が日本にありこれからも日本で生活する以上、日本をよく知り、日本人々とより多く交流していくことが必要だということから、カリキュラムを変えて日本の歴史・政治・文化などを教えるために社会科を入れ、積極的に学校外に出て学習をしていることなどが紹介された。

最後に、この学校間の国際交流を子どもが大変楽しみにしていることやこうした交流を続けることによって子どもたちが生き生きとしてきたこと。今後、交流も場をもっと広げることによって国際性をもっと育つはず、従って教師がどれだけ国際意識を持っているか教師がどれだけ変わるかに子どもの国際性の育成が大きく影響されるはずだと提言された。

研究討議では、

- ・「共存共栄、一人一人が世界観を持つ事が重要だ」
 - ・「国際理解教育を、機能的、演繹的に追究するのも1方法でないか」
 - ・「国際理解教育は、『知識・心・経験』の三要素がそろって初めて成立する」
 - ・「国際理解教育は、最終的には人と人のふれあいを通して他者と自己を理解すること」
 - ・「教師がしっかりと人権を大事にした教育を行うことが外国人にたいする態度に生かされてくる」
 - ・「今までの国際理解教育は官のレベルであった。これからは民のレベルにならなくてはいけない。つまり子どもがまちがうことを問われる時代から、子どもがまちがうことを大事にされる時代にならなくてはいけない」
 - ・「すべての子に今日の授業のような国際交流経験を積むことは難しい。従って模倣的シュミレーション体験を授業の中でどんどんやる必要がある」など
- これからの国際理解教育の方向を示唆してくれる実り多い話し合いがされた。

《実践校紹介》

国際性を育てる

札幌市立八軒西小学校 池田 幸一

1. 研究経過

本校の国際理解教育は、海外帰国子女教育に端を発する。開校当時より帰国子女が多く在学し、過去4回文部省の海外帰国子女教育研究指定校の指定を受け研究を続けてきた。この研究を通し、これからの学校教育では子ども一人ひとりに豊かな国際性を育てることが大切であることを痛感するようになった。そして、「国際性豊かな子どもの育成」をめざして実践研究に取り組み、昨年7月研究成果を発表し多くの方にご指導をいただくことができた。

今年度からは、これまでの成果をもとに「豊かな個性と国際性に富むたくましい子どもの育成」に向けて研究をすすめている。

2. 国際性を育てる

本校が小学校段階で培いたい国際性の基礎を子どもの姿で考えると次の通りである。

- ・自分の考えを明確に表現したり、意思を伝えることができる。
- ・友達の考えや行動を受け入れたり認めたりすることができる。
- ・相手の心を理解しようとしたり、他の子どもの行いに感動できる。
- ・人それぞれの違いに気付き、多様性を認めることができる。

国際性は、毎日の授業を通して少しずつ身についていくものである。そのため、本校では、教科を基盤に授業研究を中心にしながら、教育活動全体を通して国際性を育てる努力を継続している。

表 1

3. 具体的な実践

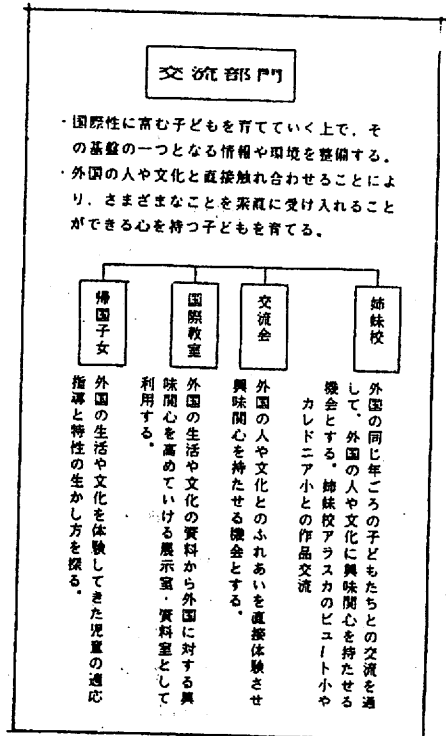
研究は、授業部門と交流部門の二つにわけて行なっている。二つの部門は、それぞれのねらいを達成するように実践を深めるとともに、相互に関連を持たせながら取り組んでいる。

ここでは、交流部門の一つ留学生交流会の実践を中心に、国際性を高める取り組みの一端を紹介する。交流部門は、表1のように四つの分野に分かれ、教科の学習とは違った面から国際性を育てる取り組みを行なっている。

留学生交流会

交流会は、毎年2回、7月と2月に北海道大学の留学生に来校してもらい行なっている。

留学生交流会は、今年11年目を迎えた。今回7月は20回目。21カ国、31名の留学生が来校。日程は表2の通り。交流会を日常化し無理なく継続できるよう、事前に特別な準備や時間をかけないようにしている。



①全校集会

表 2

集会は、国際委員会の児童が計画し子どもたちの手ですすめている。歓迎の挨拶、歓迎の歌、留学生の案内など子どもたちが仕事を分担し集会を盛りあげている。

留学生には日本語で自己紹介のあと、自分の国の言葉でも挨拶をしてもらうので、子どもたちは言葉の違ういろいろな挨拶を聞くことができる。21カ国もの人が同じ場所に集まっているので、目の色、皮膚の色、髪の色、言葉等の違いが一目でわかる。

また、留学生の中には民族衣装を着てくる人もるので普段の授業では味わえない貴重な体験になっている。

②各教室で紹介・会食

各学級には1・2名の留学生が入り、その学級で子どもたちと一緒に給食を食べる。子どもたちは、給食時間の過ごし方を工夫して楽しい会食を計画している。食事は、宗教的な理由で肉を食べない留学生がいるので日本食である。イスラム圏から来た留学生には、お昼のお祈りのために適当な場所を決めたり職員も子ども以上に日常とは違う体験をしている。

③学級・学年交流

この時間は、学級・学年ごとに留学生と交流を深める活動を行なう。各学年には交流のねらいがあり、それに基づいて子どもたちと計画をする。低学年は、一緒に遊ぶ。中学年は、留学生の国に関心を持つ。高学年は、相手の国を知るとともに自分の国のことを伝える。例えば、5・6年生は事前に留学生の国の経済・政治・文化などを調べ質問をしたり、教えてもらったりする。

留学生の中には、自分の国の様子を説明するためにビデオ・スライド・写真などを用意してくる人がいるので、子どもたちは大変興味を持ち話を聞くのを楽しみにしている。留学生には、家族がいたり年齢もさまざま、職業人もいたりして、彼らの話す内容は職員にも大変参考になることが多い。

4. 今後の課題

授業部門と交流部門の二つの面から国際性を育てる取り組みを行なってきた。これまでの反省から、これからは日本の文化や伝統の理解に力を入れていくことが大切であると考えている。文化と伝統の理解については、主に社会科で取り扱う。日本の文化や伝統を理解し、「日本人としての自覚」を持つ児童の育成を考えたときに、文化や伝統を生き方、価値観、行動様式のあらわれととらえるならば、社会科の学習だけではその扱いは不十分である。他の教科や特別活動などのカリキュラムに文化や伝統に関する具体的な内容を位置付けていきたい。

さらに、児童が古くからある季節の行事や地域の伝統的な行事などに積極的に参加するよう働きかけ、体験を通して自然にふるさとの文化や伝統に親しみ関心を持つようにさせる配慮も大切である。

過日、PTAが行なった”海外生活体験談を聞く会”でチェコ人のお母さんが「日本に住んでみて思うことは、日本人は自分の国の文化や習慣をどんどん捨てているようです」と、話していたことが心に残っている。

夏の交流会

- | | |
|-------|----------------|
| 1. 日時 | 7月9日(金) 10:00～ |
| 2. 内容 | 16:00 |
| 10:00 | 来校・オリエンテーション |
| 10:20 | 校内見学 |
| 10:45 | 授業参観 |
| 11:35 | 全校集会 |
| 12:10 | 各教室で紹介・給食 |
| 13:20 | 留学生と遊ぶ |
| 13:40 | 学級・学年ごとに交流 |
| 15:00 | 職員との交流・スポーツ |
| 16:00 | 終了 |

oo
oo
海外勤務をおえてoo
oo

明日できることは今日しない

——ベネズエラでの生活見聞記より——

長沼町立南長沼小学校長 一條 敏

南アメリカに暮すのは、初めての経験だったが、いつの間にかもう3年の歳月が流れてしまった。

日本にいたときは、教育という枠のなかでの国際理解教育とか・現地理解教育とか、教科のなかでの南アメリカの自然や文化、さらに、昭和50年代に行政でヨーロッパ・アジアで研修する機会に恵まれたぐらいで、いわゆる「ラテン感覚」のベネズエラで、今までの常識が通用するのかどうか、大いに悩んだものだから、この社会での「物差し」が分かって来るにつれて、教育活動への対応もずい分変わってきたような気がする。

ベネズエラの物差しは、目盛りこそセンチメートルだが、日本の物とは長さも測り方もかなり異なるようだ。そしてバラエティに富んだ物の見方には驚かされることが多い。

信号待ちをしている車が後ろから追突されて文句を言っても「私はちゃんと止まったのに、あなたが急にバックしたんじゃないの」と言い返されては、呆れて物も言えない。日本人の処理能力を遥かに越えている。

赤信号で停車していても左右からの車がないと、突如後に止まったバトカーは、警笛を鳴らして「何をしているんだ、モタモタしないで早く行けー」と催促する。

多少ルール違反でも、車を流すことが優先との姿勢か、従って普段でも赤信号は濃い黄色と言った性格となり、実にフレキシブルな交通システムが出来あがり、この交通渋滞を招いていることも少なくない。また、深夜交通の全くとだえた交差点でも空しく信号待ちをしなくてお巡りさんから違反切符を切られるかも知れない某国と違って何と大らかなことか。……………

学生時代、英語の授業で学ぶ有名な諺で「今日出来ることを明日に伸ばすな」ということがあるが、ここでは「明日出来ることは、今日しない」とそのニュアンスを変える、本当に明日やってくれればよいのだが、「明日」=明日以降のある日=する積もり、というのがより現実的な解釈で、仕事の進捗状況確認に骨が折れる。

「怠惰」と「楽天的」とは、本来異なったレベルの形容詞だが、つい同意義だと思ってしまうのは「仕事人間日本人」の悪い癖だろうか。・・・・・・・・

仕事を離ればラテン気質の気楽さは、緊張した気分を随分と和らげてくれる、初対面でも「構え」をあまり感じさせない気の置けない人達が多い、日本とちがって、対人関係の摩擦をさほど意識しなくてもすむのは実に有難い。

多少ブッキラボウであることと、返事の信頼性に少々欠けることさえ我慢すれば、投げかけた言葉には率直な応答があり、会話が弾む。

ましてや世界のミス・コンテストを荒らすベネズエラ美人が、何のためらいもなく微笑み、プエノス・ディアス（おはよう）と気さくに答えてくれれば、日頃のストレスも簡単に解消されようと言うものだ。

人と人が会話する距離には、3種類あって民族や文化によりそれらが微妙に異なるとどこかで読んだことがある、赤の他人同士の距離・知り合い同志の距離・緊密な愛情を持つ同志の距離・ベネズエラ人の知り合い同志の距離は、日本人にとって緊密な愛情を持つ同志の距離にウンと近いと感ずることがある、その距離の短さを生理的に拒絶もせず無意識に許容しているなど、ふと思うのは、もう、この文化に心地良く同化してしまった証拠なのだろうか、と振り返ってなつかしいラテンの文化を思う今日この頃です。

(先生は今年の3月まで、ベネズエラ・カラカス日本人学校校長として勤務されました。)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

海外からの便り

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

海外教育施設に派遣中の

先生よりお便りが届いています。

平成5年派遣 マナオス日本人学校 河野 匡宏 先生より
(広島町立広葉中学校在籍) ブラジルの自然についてのお便りが届いています。

休暇を利用して、十日間余りの国内旅行に行ってきた。驚くこと、感動すること、改めて知らされることなど様々でした。旅行の行程は、マナオス～パンタナール～イグナス～リオデジャネーロ～サルバドール～マナオス、およそ10,000kmです。

私が最初に訪れたのは、野生動物の最も密度の高い生息地であるパンタナールです。クイアバ空港からおよそ200kmの舗装道路、そして70kmジャングルを5時間走りました。門番の用に横わたるワニや水鳥、そして、トゥユの大生息地。何とも表現のしようのない光景でした。本州の広さにも匹敵する湿原のほんの一部の観察でしたが、本当の自然を見せられた感じでした。

平成5年度派遣 ペナン日本人学校 森 峰 智 子 先生より
(富良野市富良野小学校在籍) 元気な便りが届きました。

御無沙汰しています。皆様、「Apa Khabar?」(お元気ですか。)

「Saya Khabar Baik.」(わたしは元気です。)

早いもので、4月9日にペナンに赴任して以来、およそ5カ月が過ぎようとしています。この間、めまぐるしい程のできごとがわたしの前を駆け抜けて行きました。見るもの、聞く物のほとんどが珍しく、好奇心を沸かせてくれました。

例えば、熱帯雨林特有の鮮やかな草木や湿気を伴った気候、様々な人種と言語及び宗教、マレーシア独特の建物や乗り物、どれもがわたしの目に飛び込んできました。

ペナンに着いたその日から、わたしは、ペナンが大好きになってしまいました。こちらに来ることができたのも、こんな素直な気持ちで毎日が過ごせることも、皆様のお陰と感謝しています。

ジュネーブ補習校 小島雅人先生 プサン日本人学校 坪内夕有希子先生
ジャカルタ日本人学校 佐々木俊朗先生 あさひ学園(米国) 橋 場 仁先生
世界各地で活躍されているみなさんから、たくさんのお便りをいただきました。

☆☆☆☆ I E F O R U M ☆☆☆☆

IE (Intercultural Education) FORUMとは、我々会員の自由な研究交流の場です。異なる国、文化・民族の間の相互理解を目指している私達にとって、常に情報のアンテナを張り巡らす事は、欠かすことができません。情報は、交流してこそ役立つものです。21世紀を見通した研究を進めて行くためにも、会員のみなさん一人ひとりの情報の発信をお待ちしています。

✍ 図 書 紹 介 ✍

帰国子女教育は、1960年代の後半からの、主として適応教育を主眼においたものからスタートしたといえる。現在においては、幾多の変遷をへて、帰国子女の個性豊かで異文化を理解するなどの内面の特性を認め、その特性を一般の児童・生徒の国際理解教育の為に積極的に活用しようとする試みが数多く見られるようになった。今回は、まず、この帰国子女の生活を取り上げた本を紹介する。

ニ ュ ー ヨ ー ク 日 本 人 教 育 事 情

岡田光代著(岩波書店)

〈著者紹介〉おかだ みつよ 1960年生まれ

ニューヨークで教育問題を中心に執筆

在外教育施設の派遣教員を目指す人にとって、在外教育施設においてどのような教育を営むのか、どのような子供達が、そして、教育環境はどのようなのかということは大変興味のあるところである。

この本は、ニューヨークに住む日本人の教育状況を、長年ニューヨークに住み、著者自身の留学、そして、補習校での教師としての経験を土台にしながら、記者としての取材活動の集約として書かれている。

日本人学校の置かれた立場や望まれていることは、地域によって様々でありこの本の舞台となったニューヨークの状況が、すべてに当てはまるとはいえない。しかし、「現地校」「補習校」「日本人学校」という3つのキーワードと、それぞれの状況の中で生活する子供達の姿を容易に理解することができる。

帰国子女という言葉にある種の羨望を抱くことがあるかも知れない、きっと英語でペラペラ話し楽しく生活していたのだろうと。しかし、異文化で暮らす子供達の苦しさをなかなか理解することは難しい。この本で紹介されているように、塾産業がニューヨークにおいても繁盛している状況には驚かされる。

また、第3章の日本人学校では、教師の立場ではなく、外からみた日本人学校の姿を知ることができる。日本人学校が、抱える問題点をいろいろと紹介してくれている。とくに、著者が指摘している日本人学校の閉鎖性については、これからの日本人学校の姿を考えるうえで大変な示唆を与えていると思う。

派遣教員を経験された方は、自分の任地と比べられて、志されている方には、日本人学校とはいったいどんなものなのか、その具体化のために読まれるとよいと思う。岩波新書なので手軽に読むことができるのがありがたい。

編集部からの一言

ますます国際理解教育の実践化が叫ばれているこのごろですが、教室における具体化はなかなか進まないのが実際のところだと思います。「その必要性は分かっているのだけだね。」という先生方の嘆きが聞こえるようです。このような状況だからこそ我々は、教室にしっかりと根をおろした授業を作り範を示さなければならないと考えます。今回の会報では、会員の交流の場としての活用ばかりでなく、実践交流の場作りを願い、文部省の帰国子女研究協力校として長年に渡る実践を積み重ねて来ている札幌市八軒西小学校を紹介し、また、「IE FORUM」というコラム欄を作り図書紹介や研究紹介など、我々の情報交流の場も新たに設けました。

編集部では、この会報が、研究の交流の場となり、新たな仲間作りのきっかけになることを願っています。

是非、各地の実践をお送りください。

(第26号編集責任者 中村 淳)